

「生ましめんかな」論

——栗原貞子の原点としての「原爆創生記」を視野に入れて——

松本 滋 恵

はじめに

栗原貞子の文学出発点は、広島県可部高等女学校在籍中に遡る。この頃から、文学書を読み、短歌・詩を中心に創作活動を始めている。卒業後は、歌誌「処女林」(後「真樹」と改題)の同人となっている。更に、『中国新聞』月曜文壇に短歌・詩を投稿し、「文芸」面に土居貞子の名で掲載されている。僅か十七歳で「処女林」の中心人物であったようだ。このことに関連して、伊藤成彦氏は『栗原貞子全詩篇』において貞子による五首をあげた上で、次のように指摘している。

土居貞子の名で『中国新聞』(一九三〇年十二月二十二

日)「文芸」面(五面)「中国歌壇」に掲載された。同面に

作者・土井貞子^{マユ}は「第六回広島短歌会記」を寄稿して「吾

妹広島支社創立以来五ヶ月、機関雑誌『処女林』の発行後二ヶ月にして果然、広島歌壇及び詩壇へまでセンセーションをあたへた正確な新時代精神から出発した私達の歩みに双手をあげて集まって下さった方が今回も四十三名(うち女性十名)で相変わらずの盛会でございました」と書いて、作者がこうした活動の中心にいたことを窺わせる。^(注1)

地方新聞ではあるが短歌・詩を投稿し、掲載されたことは、同人からの評価にもつながり、貞子にとって創作意欲を掻き立てられた出来事であったことが窺える。既にここに歌人・詩人としての素養があったことが確認できる。

貞子は、詩集『私は広島を証言する』の中で第一章を「原爆創生記」と記し、次のように述べている。

詩集のタイトルである「私は広島を証言する」と言う詩

は(中略)「生ましめんかな」の詩とともに数多くの出版物に転載され放送でもしばしば朗読された。「原爆で死んだ幸子さん」と共に三つの詩は私の戦後の原点である。(中略) この集は原爆当時の作品を中心に原爆の悲惨にも崩れぬ人間の愛のかなしさ、美しさを軸に原爆のなか、ら立ちあがって行く人々の姿を原爆創生記とも言うべくこの集にあつめた。なお「生ましめんかな」と「原爆で死んだ幸子さん」はともに実在の明暗両面のものであるが、「生ましめんかな」の赤ちゃんは今、二十六才となり愛や結婚について思う年頃となった。^(注2)

貞子が言う「明暗両面」を額面通りに受け取ると「生ましめんかな」の赤ん坊は生きていて「原爆で死んだ幸子さん」の幸子さんが死んだことは「事実」であると読み取れる。この文章から考えれば、この場合「明」と「暗」は同じ比重で「生」と「死」に分けられるが、詩においては同等の比重と言えらるるか。「生ましめんかな」の赤ちゃんは、生きていたため二十六年経てば美しく成長し、愛や結婚について将来を夢みることができ。さらに、生の連鎖という将来にわたり多くの可能性を携えた希望がある。しかし、幸子さんは死によってこの世から消され、顔を見ることも、声を聴くことも、肌のぬくもりも感じることが無く、ただ思い出の中に生き、生の終止符を打つこと

になる。「明暗両面」という四文字の言葉の中に計り知れない貞子の思いが凝縮されているのである。この二作品及び「私は広島を証言する」の中でも「明暗両面」は、どのように表現されているのか。また、貞子が言う「原点」とは、どのようなことなのか三作品を分析し「原点」の内実を明らかにする。

前述した三作品の書誌は次の通りである。

「生ましめんかな」^(注3)の詩作は、一九四五年八月下旬であり、初出は『中国文化』創刊号(原子爆弾特集号)に収録され、一九四六年三月に発行された。「原爆で死んだ幸子さん」の詩作は、一九五二年五月であり、初出は『私は広島を証言する』に収録され、一九五九年八月に発行された。「私は広島を証言する」の詩作は、朝鮮戦争の期間であるが年月不明である。初出は『原子雲の下より』に収録され、一九五二年九月に発行された。

一 「明暗両面」の視点^が醸成された背景

貞子は一九三二年、栗原唯一がアナキストであり、準禁治産者であることから両親に反対されて出奔した上で結婚した。當時すでに、唯一がアナキストの活動家であったことは、特高から甲号特高要視察人とされ、唯一の住所の所轄署の特高係から監視される事を意味していた。関東大震災の時、唯一は、朝鮮人や社会主義者たちが虐殺されたことに怒り、中学校を中退し、

上京して平民社の運動に参加している。唯一のこの行動は、正義感、精悍のあらわれであると窺える。唯一は、アナキストとして生きて行く運命の過酷さを知っていた。それ故、唯一は、貞子に覚悟を促したようだが、貞子はそれを自覚して付いて行った。そのため、貞子は、唯一の思想を受け入れて行ったようだ。その裏付けとして次のことが挙げられる。

「戦争中秘かに書きとめた『手紙』―ピーター・クロボトキンに送る―」（一九四一・四）という詩がある。さらに「戦争とは何か」（一九四二・一〇）は、夫婦合作とも言うべき軍国主義に抵抗した反戦詩である。^(注4)その詩は、唯一が一九四〇年七月に徴用で軍属として上海に上陸し、その時日本軍人の残虐行為を目撃したことを纏めたものである。

貞子は、平和を希求して止まなかった当時のことを、「心中ひそかに軍国主義に抵抗し、戦局を語りあつてまぬかれ得ぬ敗戦の日を待った^(注5)」と記している。この記述から貞子が戦争中権力の抑圧から解放される日を待ちわびていたことが窺える。

娘の真理子氏が「十八歳で非国民と言われる社会主義者の唯一と結婚し、極貧のどん底を生き抜いてきた母^(注6)」と語っているように、貞子は思想ゆえに世からも親からも見捨てられ、貧苦を嘗め尽くし、苛酷な生活を強いられた。その体験により、世の中の底辺の人々の心情が理解できた。これは赤貧の中にあっても希望を失わなかった事からの生き様が、付け焼き場や借り

物ではなく、自ずと培われた心性であり姿勢であると推察される。貞子は、惨状の中にも人間としての温かみを見据え、重層的な視点で戦争をより広く捉えていると言えるであろう。貞子は戦争中、戦争賛美という時局下においてアナキストとしてのアイデンティティをより確立し、なにもものにも束縛されない自由の精神において世情を観照し、世間的価値に迎合せず、戦争へと突き進む日本を見ていたと言える。自分の人生観や世界観から、社会がどう動いているか常に検証して生きていくこの精神は、貞子自身の終生、根底から変わることのない一貫性であると見通している。

二 「生ましめんかな」における「明暗両面」

こわれたビルディングの地下室の夜であった。／原子爆弾の負傷者達は／くらいローソク一本ない地下室を／うずめていっばいだった。／生ぐさい血の臭い、死臭、汗くさい人いきれ、うめき声。／その中から不思議な声がきこえて来た。／赤ん坊がうまれる」と云うのだ。／この地獄の底のような地下室で今、若い女が／産気づいているのだ。／マッチ一本ないくらがりの中でどうしたらいいのだろう。／人々は自分の痛みを忘れて気づかった。／と、「私が産婆です。私が生まれましょう」と云ったのは、さっきまでうめいてい

た重傷者だ。／かくてくらがりの地獄の底で新しい生命はう
 まれた。／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死
 んだ。／生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つ
 (注7)
 とも。

この詩の成立に関して次のような記述がある。

原爆でこわれたビルの暗い地下室で、八月七日の夜、赤
 ん坊が生まれたと言う話を近所のおばさんから聞いたのは、
 八月の下旬だった。(中略)全体が死にとり巻かれた状態
 だったので、その話を聞いた私は、その場面だけが、宗教
 画のように明るく輝いているように感じられ、深い感動が
 からだの中を突きぬけた。家にかえってノートの端にひと
 息に書きつけたのが「生ましめんかな」の詩であった(傍
 線引用者。以下同様)。(注8)

この詩を「ひと息に書いた」と言っているように、構成にお
 いても一連で収められていることから、貞子の息吹と感動が看
 取できる。貞子が偶然聞いた話であったが、貞子の培われた感
 性を触発し、視座を措定し、詩作への契機となった。その背景
 には戦時中、思想ゆえに家族もろとも精神的にも、物理的にも
 抑圧された苛酷な生活を強いられていた事実があった。そのし

がらみが敗戦により解かれ自由になったが、原爆の惨禍は自由
 への解放を打ち砕く状態であった。貞子も被爆者であるだけに
 現状はともあれ、壊れたビルの地下室で赤ん坊が生まれた実話
 はその場面だけが「宗教画」のように明るく輝いているように
 感動したのであろう。

小松弘愛氏は、このことに関連して次のように述べている。

・闇の中に一条の光をさしこめるようなこの詩は記憶して
 おきたい一編です。
 ・〈かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。／
 かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。〉
 この対句仕立ての二行は、生と死の対比をあざやかに示
 し、(中略)〈生ましめんかな／生ましめんかな／己が命
 捨つとも〉というリフレインを含む文語調のオクターブ
 の高さも、抵抗なく読者の心にしみこんでゆくのではない
 か、(中略)ほとんど宗教的と言ってもよい「祈り」の声
 として、です。(傍線部分論者)

・この産婆さん、三好ウメヨさんという方は、その夜死ん
 だのでなく、戦後二〇数年生きのび、一九七一年、六五
 歳で亡くなっています。このことに関して『女性自身』
 と『中国新聞』の記事がある。

・詩の中の、血まみれのまま死んだ産婆さん、それは、八

月六日のヒロシマ、ひいては八月九日のナガサキで、原爆のために亡くなっていった、おびただしい死者たちの象徴的存在として受けとめる、ということですが。このほうが、作品をよりふくらみのあるもの、広がりのあるものとして享受できるはずで。

・作者が強く訴えたいこと、つまりテーマを鮮烈にうち出したための虚構の導入ということになりました。(中略)
あまり事実にとらわれず、あくまで作品は作品として読んでいただきたいと思えます。(中略) 作品は事実の単なる記述にあるのではなく、想像力によって真実にせまるもだ、ということになりました。^(注9)

「生ましめんかな」の産婆は、事実としては生きていた。産婆は血まみれのまま死んだことの解釈として小松氏は「想像力によって真実に迫るものです」と述べている。つまり、この詩は、産婆は死んだからこそ感動がひとしお湧き上がるように構築されている。このことよって、この詩はフィクションの要素が組み込まれることで「死」と「生」について、事実より、さらに真実性を高めたと考えられる。

貞子は「生ましめんかな」を発表した後、この象徴的な事実は一体何を意味するであろうかと思ひ、結論付けた文章があるので、次に引用する。

・暗い地下室で生まれた赤ん坊とは一体何なのだろう。それはアジア侵略の十五年戦争の暗い時代の末期に原爆が投下され、廃墟の中から生まれた世界平和の希望を意味するヒロシマであったことに気づかされたのだった。では、血まみれのまま暁を待たず死んだ産婆さんとは一体何を意味するものであろうか。それは八月六日の平和を待たずに死んでいった二十万の被爆者を意味するのではないか。二十万の被爆者が死ぬことよって世界平和の希望であるヒロシマが生まれたのであった。^(注10)

・結末の「生ましめんかな」「生ましめんかな」のリフレインは地下室の被爆者たちの合唱であるとともに戦争や原爆のない平和な世界を生ませようというヒロシマの大合唱でもある。^(注11)

この詩は象徴的であり、素材だけに読み手によって様々に解釈される。貞子は、何のための戦争か、戦争がもたらす空しさ、喪失感の中で死んでいったあまたの死者たちよって平和は生まれたのだと述べている。さらに、「死を無駄にするな」と死者たちからのメッセージを伝え、何としても恒久平和を希求し維持しなければならぬと訴えている。

この詩は「こわれたビルディングの地下室の夜であった。」と一言一文からはじまる。実際に原爆が投下されたのは朝である。

しかし、朝ではなく、昼でもなく夜から始まっている。なんとなくでも夜であることを読者に訴えたかったのである。その意図とは、如何なるものであろうか。〈原子爆弾の負傷者達は／くらいローソク一本もない地下室を／うずめていっばいだった〉と言う描写に着目するならば、原子爆弾の負傷者達は、大なり小なり、原爆の熱線による火傷した人だと理解できる。多くの人は、座る気力もなく、横臥していたであろう。〈生ぐさい血の臭い、死臭、汗くさい人いきれ、うめき声〉この文においては、貞子は、地下室の現状を感覚に訴えている。聞こえるのはうめき声、嗅覚は血の臭い、死臭、汗くさい人いきれだけとはどのような状況であろうか。しかも蒸暑い夏、八月である。臭いは温度と湿度とに比例するという。地獄としか言いようがない状況である。〈その中から不思議な声がかきこえて来た。／「赤ん坊が生まれる」と云うのだ。〉この行から、その場に居合わせたほとんどの人は、失意、虚脱感の中にあるのに対し、うめき声の中に「赤ん坊が生まれる」と発話された言葉は、不思議な声に聞こえ、新しい命の誕生は祝福、生への希望であることが読みとれる。〈この地獄のそのような地下室で今、若い女が／産気づいているのだ。／マッチ一本ないくらがりの中でどうしたらいいのだろう。／人々は自分の痛みを忘れて気づかった。〉この箇所から、これまでその場は、無気力の雰囲気で充満していた。今、現実的に「産気づいている」緊張感の中に、その場に集う人はど

うすることもできない現状だが、どうしたらいいのだろうかお互いが、思いはかるうちに痛みを忘れたと解せる。〈と、「私が産婆です。私が生ませましよう」／と云ったのは、さっきまでうめいていた重傷者だ。〉の描写から、自分の命がいつ果てるとも分らない中で、産婆の、人間の使命感、高潔さが浮き彫りとなっている。〈かくてくらがりの地獄の底で新しい生命は生まれた。／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。／生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つとも〉から、「産婆は血まみれのまま死んだ」とは悲惨でこそあるが、一方で「死」と「生」が同時に地獄の底で起きたことをも示している。即ち、「暗がり」だからこそ闇の中で生まれた赤子が「明るさ」になり希望となった。貞子の「明暗両面」がここに表現されたといえる。〈生ましめんかな／生ましめんかな／己が命捨つとも〉は、犠牲の美しさへの讚美、賞賛の眼差しを表わしている。詩は、夜から始まり、暁に終わる。終わりの中に始まりが内蔵され、夜から朝に通じたのだ。当然のことであり日常のことであるが、地下室では非日常が起こった。非日常であった事実が「生ましめんかな」を誕生させた。この詩は、世界各国に翻訳され、作曲され、歌唱され、ドラマ化され、教科書に採用された。「生ましめんかな」は様々な形で受容され、栗原貞子の名を広め、威名となった作品である。

この詩は「…た。…だ。…た。」と「た」が五回「だ」が四回

と断定的な過去形の語法が末尾にある。詩の結文（生まれめんかな／生まれめんかな／己が命捨つとも）という文語体表現が特異的であるとともに、未来への希望を示し読み手を惹き付けている。詩の構造、表現からも存在感と未来への希望を表し、貞子の豊饒な語彙と詩へのこだわりが垣間見える。

更には、この詩が戦後すぐに詩作されたことにも注目したい。戦時中は発表できる日を待ちこがれながら秘かに詩作しノートに多くの詩を書きためていた。終戦は、耐えに耐えた詩作への情熱の火に点火され、その熱い思いがほとばしり出たとさえいであろうか。寒い長い冬の時代が終りこれから暖かい希望にあふれた春の時代となる。このような作者の精神に「宗教画」のような一条の光がさしたと考えられる。貞子の自由を実感する解放感と、作品を発表したい情熱とが原動力になり「生まれめんかな」は『中国文化』の創刊号を飾る詩となったのである。貞子は、「赤子の誕生」を「宗教画」のような耀きとして定位させた。闇闇だからこそ、闇の中の耀きは「希望」になった。貞子が言うここでの「明暗両面」とは、「明」と「暗」が決して同じ比重であるのではなく、「死」（暗）を乗り越えての「生」（明）であるため「明」が浮き彫りとなっている。「明」が強調され希望であったからこそ多くの人に賞賛された。貞子は、「明」こそを強調するため、この詩の冒頭は夜にしなければならなかったと解釈できる。

三 「原爆で死んだ幸子さん」においての「明暗両面」

硫黄島陥ち／沖繩玉砕し／空っぽの骨箱もかえらず／国中の街々は黒く焼け払われ／その上に／青い空が森閑とせずもる／一九四五年八月六日。／あなたは綿の入った防空頭巾を／肩にかけ／強制疎開の家屋の破壊作業に動員された／突然／きらめく青い閃光／ビルが崩れる／炎が燃える／渦巻く煙のなか／たれ下った電線の下をくぐりながら／逃げて行く人の群。／あの日から三日目の晩／あなたは死体になってかえって来た。／空襲警報に入ったなり／解除されない暗い夜。／闇夜のなかで広島が赤く燃えている。／日本全土がお通夜のような敗戦の／その前夜。／防空幕で遮蔽した暗い部屋。／仏壇の前にねかされたあなたの顔に／白いハンカチがかけてある。／たそがれどき／既に発狂した罹災者たちは／獣のようにおらびながら／教室のなかを駆け回り／仁王のように火ぶくれた人間が／生きながら死臭を発してうめいていた。／己斐小学校の収容所の土間、／ぼろ布を並べたような死体のなか／鉄製の認識表でやっとなかったあなた。／あなたの顔に／誰がかけたのか白いハンカチが／かけてあった。／そのハンカチは焼け爛れた

顔に／びったりくっついて離れはしない。／女学校三年生、／今度の戦争の意味さえ知らず／花さかぬま、死んで行った幸子さん。／あなたのお母さんは／あなたの皮膚に焦げついて／ぼろぼろに焼けた防空服の上に／真新しい花模様の白い浴衣を／着せかけた。／縫ったま、戦争で一日も着せてやる日がなかった」と／あなたを抱いたま、崩れて泣いた。

「原爆で死んだ幸子さん」は貞子の実体験をもとに詩作されたものである。^(注12)「原爆で死んだ幸子さん」に関連して、自著の中に次のように記述している。

・〈食べたいと云うひし トマトを与へざりし児の うつしえに 母かこち泣く〉〈帰りきて食べよと 見送りし子は 帰らず 仏壇にそなふ そのトマト紅く〉〈焼死せし 児が写真の前に トマト置き 食べよ食べよと母泣きくどく〉(中略)。たった一人の子供が八月六日の朝トマトを食べたいといってせがんだのに、与えないで学校に出して、それなり原爆で焼き殺されてしまったお母さんの深い嘆きを書いたもので、これは沢山のヒロシマのお母さんの嘆きに通じるものでございます。^(注13)

・死んだわが子の顔を見てやることもできないお母さんの

嘆き。私は、幸子さんのことを思うたびに世界中のお母さんに向かって叫びたいと思います。「お母さん、あなたの子どもを、幸子さんのように死なせてもいいですか」と。^(注14)

・生む性を持った女は原爆被爆のただ中でも子どもを生まねばなりません。戦争で最も苦しむのは母と子であります。生む性を持ち、生命を生み育てる女は何よりも平和を要求します。平和なくしては生命を生み育てることができないからです。^(注15)

貞子は、戦争で一番被害を受けるのは母と子であり、かけがえの無い我が子に幸子さんのような死を二度とさせてはならないと世界中の母親へ訴えている。訴えは叫びとなり、こだまとなり、こだまが集まりシュプレヒコールとなることを願っていることさえ言うことができる。貞子は何より母親の視座に立つて詩作を行っているのである。

この詩は、幸子さんの遺体を引き取りに行った日から約七年の歳月が流れてから書かれたものである。その間プレス・コードのため発表できず、心に秘めた感情を吐き出し、何度も反芻したかのように推敲されたと思われる。詩の構成において、一連は、第二次世界大戦の実相、次に、幸子さんの八月六日当日の様子、二連に進むと原爆投下時の状況、三連は、幸子さんを

詳細に描写している。四連では、貞子が己斐小学校で見た原爆の悲惨、惨状が詠まれ、五連に進むとまたしても幸子さんの状況が示された上で、母による抱擁と涙が詠まれている。叙事詩のなかにも母の愛が込められることによって抒情詩としても読者に訴えていると理解できよう。

この詩は〈硫黄島陥ち／沖繩玉砕し／空っぽの骨箱もかえらず〉という冒頭の描写において、貞子が戦争という悪の絶対値を体感した言葉が詠まれている。貞子は、「私は戦争体験をバネにして平和創造について報告したいと思います」^(注16)と記述しているように、戦争に対しての空しさ、憤り、怒りを詠んでいる。

〈国中の街々は黒く焼け払われ／その上に／青い空が森閑とせずもる〉とはどういう意味なのか。「折づる」(一九六〇・六)と、いう貞子の詩がある。その中に〈原爆の子の像の下に／ひっそりしずもり〉と記されている。この詩ではひっそり佇んでいると解釈できるが、ここでは〈その上に青い空が森閑としずもる〉である。青い空と想像すれば、雲一つ無い晴れ渡る空を思い浮かべるが、それに続く言葉は「しずもる」とある。視点を変え、その言葉がどのような光景の下で語られているかを読んでみる。〈街々は黒く焼け払われ／その上に〉とある。このことから青空であつても白煙がかかっていると考えられないであろうか。知識豊かな貞子は杜甫の詩〈国破れて山河在り、城春にして草木深し〉を想起したのだろうか。原爆は無人の野原に落とされた

のではない。人間の頭上に炸裂したのである。その下にはつましくとも心とむ家族の暮らしがあつた。幸子さんは母に抱かれたが、今だに遺骨すら家族の元に帰らないものも多い。戦争とは、原爆とは、将来の夢多き女学生の上にも惨劇が容赦なく降りそそぎ、死は、家族の者までも悲嘆へと引きずり込む。貞子は、戦争の不条理、無慈悲、残忍性、反人間性への激しい怒りと憤懣をもって訴えていると解釈できる。母が我が子にできなかったのは、遺体にせめて真新しい浴衣を着せて抱いてやることだった。あの世に行つてもつと幸せになつて欲しいとの願ひである。この行為は、母が我が子にしてやる最後の愛情表現である。いわゆる母の愛の凝縮である。日本は、幸子がこの世に生を受けたころより平和とはほど遠い戦争に向かつていた。せめてあの世に行つて戦争のない平和な暮らしをして幸せになつて欲しいとの母の願ひが「明」と言える。「暗」を見据えた中からやつと「明」を見出だしているといえるであろう。ここでの「明暗両面」の「明」と「暗」の対比は、どれほどであろうか。ほとんど「暗」としかいいようがないが、母の愛、あの世に行つて名前の如く幸せになつて欲しいと母が子に託す希望だけが「明」であると解釈できる。

四 「私は広島を証言する」 においての「明暗両面」

生き残ったわたしは／何よりも人間でありたいと願い／
 わけてひとりの母として／頬の赤い幼子や／多くの未来の
 上にかかる青空が／或日突然ひき裂かれ／かずかずの未来
 が火刑にされようとしている時／それらの屍骸にそそぐ涙
 を／生きているものの上にそそぎ／何よりも戦争に反対し
 ます／母がわが子の死を拒絶するそのことが／何かの名前
 で罰されようと／わたしの網膜にはあの日の／地獄が焼き
 ついているのです／逃げもかくれもいたしません／一九
 四五年八月六日／太陽が輝き始めて間もない時間／人らが
 敬虔に一日に入ろうとしている時／突然／街は吹きとばさ
 れ／人は火ぶくれ／七つの河は死体でうずまった／地獄を
 かいま見たものが地獄について語る時／地獄の魔王が呼
 びかえすと言う／物語りがあったとしても／わたしは生き
 残った広島の人として／どこへ行っても証言します／そ
 して「もう戦争はやめよう」と／いのちをこめて歌います。

『私は広島を証言する』のまえがきに次のような記述がある。

原爆の作品を書いた人たちは原民喜を始め、峠三吉、川手健、大田洋子、正田篠枝、美濃綾子はそれぞれの容で生涯を閉じました。原民喜、川手健の自殺はいたましく今も、私たちの胸に刺さりますが、正田篠枝、美濃綾子の死は、肉体を放射能に喰い荒され、骨まで浸食されながら、最後まで「生きたかりけり」と生の執念を持っていただけに、
 かなしさもひとしおです。^(注17)

原民喜は、被爆後の惨状を『夏の花』に書き、川手健は、広島大学の学生時代、峠三吉と活動を共にし、山代巴と『原爆に生きて』を出版した。峠三吉は『原爆詩集』を書き、さらに叙事詩をとの希望を持ち、健康を得るため手術するが、手術台上で死亡した。大田洋子は『屍の街』『夕風の街と人』その他、原爆を扱った作品を書くが、「原爆を売り物にするな」と批判され遂に挫折し、精神を病み東大の精神科へ入院し回復するものの、旅先において心臓麻痺で死亡した。正田篠枝は、プレス・コードの中で、死刑になってもいいと短歌集『さんげ』を出版した。美濃綾子は、実姉が一児を残し被爆死し、その子を引きとり洋裁の内職をしながら『広島文学』『ひろしまの河』などに体験記を投稿した。このように被爆後、様々なジャンルで原爆の作品を残した「被爆者」という共通した精神の支柱を置いた仲間、あるいは同志がこの世から去った事は、死によって閉ざさ

れた遺恨を独りだけ生き残った貞子に託され重圧となった。それに、原爆文学は当時、原爆物、広島物と揶揄されていた。原爆文学は、林京子の『祭りの場』が一九七五年芥川賞受賞したことにより、初めて市民権を得た。「私は広島を証言する」は、貞子を取り巻く世相、峻厳な検閲を見据え、孤軍奮闘し、なんとしても原爆の実情を証言しなければという堅固な決意が込められた詩であるといえる。

「私は広島を証言する」を発表した頃の状況を回想した作者による言説を次に引用する。

・「私は広島を証言する」は占領と朝鮮戦争が重なってもっともきびしい弾圧下で書いた作品である。峠三吉は「一九五〇年八月六日」の詩で「走りよってくる。走りよってくる。腰のピストルを押えた警官が走りよってくる。」と朝鮮戦争下の警官包囲の平和集会についてうたっている。^(注18)

・朝鮮戦争のきびしい言論弾圧とそれを敢えてする決意がなくては原爆についてふれることのできなかったことを意味する作品である。その頃、総合雑誌「世界」の読者が、警察にリストされるといふ、今では信じられないような状況があった。^(注19)

・占領軍の検閲制度がいったん緩和された後、朝鮮戦争で

再び言語統制が強化され、ゲンバクのゲの字も言えないと言った当時の作品で、峠三吉編アンソロジー「原子雲の下より」の詩集に、八島藤子のペンネームで発表^(注20)した。

・きびしい弾圧の中で書かれたことを念頭において読んで^(注21)ください。

貞子は、「私は原爆を証言する」の中には「原爆」という文字が一字もないことを述べているが、「一九四五年八月六日」とあるから原爆が投下された日だと断定できる。ペンネームを変えてまでも発表したい心情は、相当な覚悟があつてのことであろう。前述してきた二作品が見据えた「明暗両面」がこの作品にはどのように描写されているのか、更に考察して行く。

〈生き残ったわたしは／何よりも人間でありたいと願ひ〉の描写からは「人間」であることを切望してやまない心情が読み取れる。被爆死した人は、虫けらのように傷つき殺され人間の尊厳など微塵もなかった。私は虫けらではない。尊厳を持った人間である。人間であるからこそ、この逆境の時代の中で人間存在という視野を獲得すべきであると主張していることが読み取れる。また、権力にも服従しない、正々堂々と権力に対峙する人間存在としての強い意志があると理解できる。〈多くの未来の上にかかる青空が／或日突然ひき裂かれ〉からは、青空が原爆

投下によって、日常の穏やかさを一瞬の間に失い、暗闇の顕現

ている。

となるきのこ雲で覆われることを想起させる。(それらの屍骸にそそぐ涙を／生きているものの上にそそぎ／何よりも戦争に反対します／母がわが子の死を拒絶することが)とあるが、生きているものの上に涙をそそぐとは如何なることを意味するものであろうか。(そそぐ涙)という詩句は、「原爆で死んだ幸子さん」の我が子を抱き泣き崩れた母の涙を連想させる。(母がわが子の死を拒絶する)語のみに注目し解釈すれば、時空を超え叶わぬ希望を見据えてのことであろう。貞子は、我が子の死を体験している。伊藤成彦氏に宛てた書簡の中に「長男・哲也の事を書いた手記」がある。手記は、「可愛い坊や」から始まる。既に亡くなってから五十九年が経過しているのに、今、そこに我が子が実在し、語りかけているように書かれている。^(注22)貞子は五十九年経っても息子の死を容認できない。(死を拒絶するそのことが)から次の(何かの名前で罰せられよう)と続くため、息子を戦死させてはならない、いわゆる戦争を拒否するという意味に取れる。「生きているものの上に涙をそそぎ」とは、戦争を起こす可能性のある人間存在すべてに対してその愚かさより戦争に反対します」と宣言することによってこの言葉は「何層、戦争反対の悲痛な叫びとして定位置されているのである。貞子は(地獄について語るとき)について、次のように述べ

「地獄について語る」というのは、原爆の地獄について語ることを意味しています。そして「地獄の魔王が呼びかえす」というのは、原爆の地獄について語ると、GHQの検閲官に呼びだされるということを意味しています。占領当局は、一編の詩をかくにもそれだけの覚悟をしなければなりません^(注23)でした。

貞子は、作詩したものの、当時の時代状況によって発表できなかった。なんとしても公表しなければならぬ堅固たる意志は貞子の詩人としての使命感、人間の誠意が湧出する決断であると受け取れ、覚悟をもって発表したものであると解釈できる。いわゆる魂の告白である。さらに重ねて述べれば貞子は、プレス・コードの中、現状はどうであろうとも原爆の惨事を秘匿、隠蔽しておけなかった。だからこそペンネームを変えてまでも現状を打破し、検閲にひっかかるか、ひっかからないか、薄氷を踏むが如く、原爆の実相を詩作している。「私は広島を証言する」は、詩の題名からしても「個」が占領軍と言う「公」に決して屈しないと、正面から叩きつけた挑戦状である。貞子の並々ならぬ覚悟と決意がさらに窺える。「私は広島を証言する」においては、原爆で生き残った者の使命として、貞子自身

が広島証言者であることを宣言している。このような貞子の姿勢に対して、眞壁仁氏は「広島島の体験・被害者の課題の積極性」を指摘している。^(注24)つまり、原爆に対する貞子の姿勢を、消極的でなく、積極的に悲惨の確認、人間の尊厳を証している点で重要であると述べているのである。更に言えば、この積極性こそが貞子の未来を切り開いていったと見做せる。

貞子は自分自身にとっての詩についての思いを次のように述べている。

私にとって詩とは他者と断絶した閉鎖的な思考の表現や呪文のような謎ときや、言葉あそびではなく、世界中のすべての人間的な根源に語りかける核時代に生きる人間として、ともに人間のハートの鼓動を確かめあいたい。(傍線部分論者)

そのことが新しい何かを生んで行くものであってほしい。そして私の場合、詩の技術とはより多くの人によりよく理解されるために、より深くより美しく表現したいというねがいであること^(注25)です。

貞子は、「人間のハートの鼓動」を、互に確かめたいと述べている。お互いの心臓の鼓動を確認するには距離をおいてはできない、抱擁する、つまり、自分と同じ志である平和を願う人

あって欲しい、願望だけでなく互いが確かめあい、さらに次の段階へと踏み出して欲しい、行動して欲しいとの願いが貞子の詩には込められている。

では、この詩の中で貞子が言う「明暗両面」とは、どのようなものであろうか、詩全体は「暗」としか言いようがないが貞子は、詩の最後を「いのちをこめて歌います」として結んでいる。叫ぶのではなく「歌います」と表現されていることに注目したい。歌には心の響きがあり、不思議な力がある。始めは一人で歌っているかもしれないが、引用文にあるようにお互いのハートの鼓動を感じ「戦争反対」に賛同してくれる人が集まり大合唱になれば、世の中は変わると希望を見据えることである。こういった表現が詩の末尾に記されていることは、将来に向かって限りなく希望を見出した「明」として位置づけることが可能なのではないか。

以上のことから貞子の原点の「明暗両面」とは、「暗」のなかにも将来を見据えての希望的志向性において「明」を表現しようとする姿勢であると結論づけることができる。

おわりに

本論において考察してきたように、「明暗両面」の観点から三作品を見ると「生まれめんなかな」においては暗い地下室、しか

も夜という「暗」としか表現できない状況から「赤子の誕生」という将来に向けての限らない希望である「明」が呈示されていた。「原爆で死んだ幸子さん」においては戦争、原爆の惨状、悲惨な幸子さんの遺体は、「暗」としか言いようがないが、母の愛、あの世で幸せになってほしいとの願い、我が子への望みが「明」となっている。「私は広島を証言する」においては、「ゲンバク」のゲの字「すら口外できないプレス・コード下の状況は「暗」であるが、そのような中でも広島証言者として自己を宣言したことは「明」である。

貞子は、限りなく「暗」の状態であつても小さな光を求めて「明」を見出そうとしている。これは、戦時中アナキズムとしての思想ゆえ苛酷な生活を余儀なくさせられた体験から培われた姿勢であり、原爆の悲惨、惨状の目撃体験が作品において、「暗」の中にも「明」を見出そうとする姿勢へと繋がったといえる。

未曾有の原爆の惨劇を目撃体験したことが貞子を原爆詩人として方向付けた。前述した三作品とも叙事詩的内容であるため歴史の語り部ともいえる。事実を淡々と語るが、その反面、貞子は、事実をより深くより美しく想像を膨らませ、読み手の心に分かりやすく語っている。語りかけも、優しい呼びかけであつたり、怒りであつたり、叫びであつたり、祈りであつたりする。そこには、原爆で生き残った者の責任を受け止め、ぼろ

布のように焼き捨てられた死者たちの代弁者となることで、死んだ人たちのために事実を書き残し、次なる世代へ、継承しなければならぬ使命感が根底にある。即ち、何としても平和を守り続けなければならないという強い思いが、三作品の底辺にある。その思いを明確に刻んだ文章が『PRELUDE』の中に存在する。

詩人にとって詩は自己の存在証明である。戦争中どのよう^(注26)に生きたかと言うことと同じように戦後の責任は重大である。

ここからは、貞子の詩に対する気構え、時代の証言者として、日々の生活の中にも、万事真摯に受けとめる人間性が読み取れよう。

三作品を振り返ると「生ましめんかな」の「明暗両面」は「死と生」であり、「原爆で死んだ幸子さん」は戦争という「暗」の中に、死んだ我が子への母の愛が「明」であることが明らかになった。「私は広島を証言する」においては、占領下の闇の中、私は「証言します」「歌います」という行為の中にこそ「明」があることを指摘した。よって、被爆者として暗い絶望に陥るのではなく人間を信じ、未来に立ち向かおうとする姿勢、恒久平和を希求する崇高な精神こそが貞子の原爆詩人としての「原点」

なのである。

その後、貞子は詩作において「明暗両面」「二面性」を追求することによって、被害と加害の観点を明確にした「ヒロシマというとき」へと、その問題意識を展開させて行く。

注

- 1 伊藤成彦編『栗原貞子全詩篇』土曜美術社 二〇〇五年七月 三七頁。
- 2 栗原貞子『私は広島を証言する』詩集刊行の会 一九六七年八月六頁。
- 3 注1に同じ 八八頁。私家版では「生ましめん哉」。初版は『中国文化』創刊号（原子爆弾特集号、一九四六・二三）。『広島詩集・日本を流れる炎の河』（一九五八・八）に収められた時から表題の「哉」が「かな」と仮名書きにされた。この論文においては「生ましめんかな」と統一する。
- 4 注1に同じ「戦争とは何か」六四頁。「わたしは戦争の残虐を承認しない／わたしはどんなに美しく装われた戦争からも／みにくい悪鬼の意図を見い出す。／そして自分達だけは戦争の埒外にあつて／しきりに戦争を賛美し、煽る腹黒い／人々をにくむ。／聖戦といひ正義の戦といふところで／行われているのは何か、／殺人。放火。強姦。強盗。／逃げおくれた女達は敵兵の前に／スカートを除いて手を合わせるというのではないか。／高粱が秋風にザワくと鳴っている 高粱畑では／女に渴いた兵士達が女達を追い込んで／百鬼夜行の様を演じるのだ。／故国にあれば、よい父、よい兄、よい子が／戦場という地獄の世界では／人間性を失なってしまうて／猛獣のように荒れ狂うのだ。」
- 5 栗原貞子「光あるうち」『世界』No.224 岩波書店 一九四六四年八月 一三七頁。「私たちは少数の友人と不自由な食物の入手などで助け合いながら、心中心に軍国主義に抵抗し、戦局を語りあつてまぬかれ得ぬ敗戦の日を待った。(中略) そんな私にとって八月十五日はついに来るべき日が来たわけだった。天皇の放送を聞いたとき、「やっと戦争が終わった」と言う感慨の涙がこぼれたが、虚脱も号泣もなかった。」
- 6 栗原真理子「思い出すまま」栗原貞子は語る 一度目はあやまちでも」広島に文学館を！市民の会 二〇〇六年七月 九六頁。
- 7 詩の舞台となった貯金局は爆心地から一・五軒である。
- 8 栗原貞子『ときゆめんと ヒロシマ24年 現代の救済』社会新報 一九七〇年四月 九頁。
- 9 小松弘愛「栗原貞子 生ましめんかな ―原子爆弾秘話―」『高知学芸高等学校研究報告』第三十号別冊 一九八二年三月 一一、一二頁。なお、小松氏が触れている『女性自身』と『中国新聞』の記事に関しては、次の通りである。
 - ・『女性自身』光文社 一九八八年八月十四日号 四六―五一頁。「シリーズ人間」の中で被爆から二十二年めの「ヒロシマ・レポート」にしようと考え「生ましめんかな」の産婆の生存を確認した。「本誌がついに見つけた！原爆詩（生ましめんかな）で死んだはずの人は生きていたあの日の助産婦Ⅱ生れた子、生んだ母、生ましめた人の二十二年めの対面」と題し記事を掲載した。「最後の陣痛がきて、赤ちゃんが生まれたとき、ちょうど空襲警報で、ロウソクがつけられなくて（あかりが外へもれると空襲の目標になるから）解除になるまでヘソの緒をそのまま寝かしておいた。やっと解除になって木綿糸を五本ほどよりあわせて臍帯をしばって規美子（ウメヨ）さんの娘当時十二歳）さんが救急袋にいれておいたはさみで切った」とある。
 - ・『中国新聞』（一九八八・八・二）に「助産婦のヒロシマ」と題し次のように掲載してある。

「その時、「私が生ませてあげましょう」と言った産婆さん（三好ウメノ）は、昭和町（現中区平野町）に住んでいた。当時（三九歳）「背中と腕に大火傷を負い体温計の水銀が上がりきる高熱、自分が瀕死の重傷なのに、妊婦がいる、産気づいていると聞いたら急に起き上がって：気丈な母だった」と当時中学生で長男の淳夫さんは、記憶している。（中略）貯金局は、避難所になっていて、二、三十人が逃れて来ていた。赤ん坊が生まれると聞いて、比較的な気な女性が湯を沸かし、無事だった父（淳夫さんの）や男たちは、焼け跡から金だらいやはさみを探し出してきた。みんなが協力した。（中略）三好さんは横になったまま介助した。母（淳夫さんの）も介助しながらうめいていた。（中略）母はその後も、様子を見ていないと言って数日間は付き添っていた」とある。

- 10 栗原貞子『核時代に生きる』三一書房 一九八二年八月 一〇頁。
- 11 栗原貞子『問われるヒロシマ』三一書房 一九九二年六月 九七頁。
- 12 栗原貞子『核・天皇・被爆者』三一書房 一九七八年七月 二三～二六頁。貞子は当時のことを次のように回想している。
- 「隣に住む、幸子さんは、被爆当日、疎開作業に出て行った（爆心地から〇・五軒の土橋）。三日目に己斐小学校の収容所で死体になっていると通知があった。幸子さんの父親は、出征中のため、幸子さんの母親と、幸子さんの叔父と、貞子の三人が、一輪車をひいて遺体を引き取りに行った。貞子は、その道中広島市内の悲惨な状況を見、己斐小学校での惨状を目にする。幸子さんの遺体を一輪車に乗せて帰る途中、ゴザに巻いた幸子さんの遺体から体液が出て何とも言えない臭いがした。やっと帰った家の中は、灯火管制のため防空幕で真っ暗であった。座敷は、電灯も遮閉幕で覆われていたが、その下がほんのり明るいただけだった。母親は「こんなむごい幸子は、私は受け取ることができない」といって幸子さんの遺体に、浴衣を着せて、「戦争であなたに一度も着せることができなかつたけどこの浴衣を着ていってくださいね」といってお母さんは幸子さんをだいたまま泣き崩れた。」
- 13 注12に同じ 一九、二〇頁。
- 14 注12に同じ 二六頁。
- 15 栗原貞子「平和・被爆者・女性」『部落解放 ひろしま』第四号 部落解放同盟 ひろしま県連会 一九八六年六月 三二頁。
- 16 栗原貞子「報告！ 憲法をとりでに平和創造を」『社会党』五月号 No.298 日本社会党中央本部機関紙局 一九八一年五月 一二頁。
- 17 注2に同じ 四頁。
- 18 栗原貞子「詩と画で語りつぐ 反核詩画集 ヒロシマ」詩集刊行の会 一九八五年三月 一五頁。
- 19 栗原貞子『ヒロシマ原風景を抱いて』未來社 一九七五年七月 二二頁。
- 20 注2に同じ 六頁。
- 21 栗原貞子『詩集 核時代の童話』詩集刊行の会 一九八二年三月 五二頁。
- 22 伊藤成彦「栗原貞子の世界 ―栗原書簡の背景―」『人類が減じる前に』広島文学資料保全の会 二〇一四年一月 四一～四四頁。
- 23 「反核・平和・文化を考える―栗原貞子氏の講演から―82・5・7 第2回芸文セミナーにおいて」『芹屋市立潮見中二年との交流関連文献』栗原貞子平和記念文庫 三三六 広島女学院大学「栗原貞子平和記念文庫」所蔵。なお、この引用部分の著作者が不明のため、ご当人をご存知の方はお知らせいただけましたら幸いです。
- 24 真壁仁「怒りの証言」『詩の中にめざめる日本』岩波書店 一九六六年十月 七一頁。
- 25 栗原貞子「他者と私を結ぶ詩を」『詩と絵画 随想集』詩通信社 一九八四年十二月 四一頁。
- 26 栗原貞子「広島のかなかの私」[PRELUDE] No.25 大原三八雄 一九六五年七月 一頁。

* 詩の引用は『栗原貞子全詩編』（土曜美術社）に拠るものとする。なお、漢字は旧漢字を新漢字に改める。